医療安全

医療安全通信　第７０号

Vol. 11-1

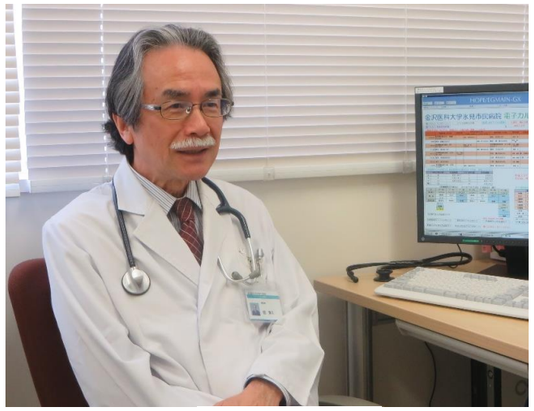
金沢医科大学氷見市民病院
医療安全小委員会
2018 年 6 月 4 日 発行

医療安全通信は、各部署で回覧サインし、保管お願いします。

回覧											

医療事故が起こる背景　―起こさないために―

病院長　栂　博久



栂病院長

医療安全について日頃より感じていることを以下に述べたいと思います。

大学病院の呼吸器内科を担当していた時に遭遇した種々の事故から学んだことを基にして、医療事故が起こる背景を捉え、起こさないために必要なことについて考えてみたいと思います。

検査や手術前に十分な根拠に基づくインフォームドコンセントが行われていない時に事故が起こると、説明が大変です。10%以上に起こる事案はすべて正確な説明が必要です。１%以下であっても死亡や重大な後遺症が残るものについては説明が必要です。専門用語はできできるだけ避け、一般の人に十分理解できる言葉を選んで丁寧に説明するようにしたいものです。

当然ではありますが、検査や手術手技について術者には十分な経験と技量が求められます。経験が十分でない若手が担当することもありますが、その場合はその旨事前に話しておき、患者、家族から了解を得ておく必要があります。その時に何よりも重要なのは、必ず上級医（指導医）が立ち会うことです。主治医が若手の場合は、最終責任は上級医が負うことになります。

不幸にして事故が起こった時に、その対処を適切に行うのはさらに重要と言えるでしょう。よく言われることですが、トラブルのない検査や手術をいくら行っても、それだけで十分な経験とは言えません。合併症や思わぬ事故に対して適切な対応が行えた時に初めてその手技について十分な経験を得ているということができます。たとえ事故にうまく対処できたとしても、事前にその可能性について話していかなければ、やはりトラブルになることは言うまでもありません。

事故が起きてからの家族に対する適切な説明も重要です。その場合、必ず主治医と上級医が立ち会うことと、事前のものも含め同じ医師が説明を行うことも必須です。同じ内容のことを話しても、話し手が違うと微妙なニュアンスは正確に伝わらないからです。それから、この説明がうまくいくかどうかは、説明者の熱心さと誠実さが家族に伝わるかどうかにかかっています。

事故の内容や原因を調べるために、剖検や AI（autopsy imaging）を行うことも有用です。正確な事実は時にはお互いに有利なあるいは不利な現実を突き付けますが、今後の事故の予防という意味からも、術者、患者のどちらにとっても有用です。

これまでの事故の経験から学んだことは、「重大な事故は、必ずごく基本的なことを怠った時に起こる」という厳粛な事実でした。

≪お知らせ≫　第１回医療安全研修会　日時：６月２８日（木）17:30～ 6 階多目的ホール

「院内暴力の未然防止について」　講師：荒井久也氏　氷見警察署　生活安全課

New Face　セーフティマネージャー

新セーフティマネージャーのみなさん

齋藤　人志（一般消化器外科）

病院は患者さんのために存在する施設です。そのため、安全な医療を安心して受けられる環境の構築は医療を受ける側と医療を提供するスタッフ側双方にとって最も大切な事であります。日々の業務に忙殺されがちですが、そんな時こそ一呼吸入れ事に当たる、その積み重ねが大きな信頼につながると思います。

大浦　一子（耳鼻いんこう科）

患者さんが質の高い医療を安全にかつ快適に受けられるためには、組織的な取り組みと共に、職員一人一人の心構えが重要だと考えます。今回の業務を通して医療安全に関して新しく学び、日々の診療に生かせればと思っています。

竹田　公信（皮膚科）

最近の医療安全で問題となる事項は、ここ数年どの病院でも同じ課題（処方ミス、転倒、事故抜去など）が上位にあがります。対策として、他職種間で実例の情報を共有し再発防止に努めますが、それだけでは解決できていないようです。今後は、今までにない斬新な発想や新たな医療機器の開発などが必要なのかもしれません。何か貢献できることがないか、常日頃から考え行動したいと思います。

竹森　美香（ME 部）

ME 部では、患者さんに安全な医療機器を提供するために適切な使用・管理・運用、院内職員に対する教育研修を行っています。他職種と連携し、医療機器に関する知識の向上をはかり安全な医療を提供できるように努力していきたいと思います。

谷内口　圭子（5 階東病棟）

医療安全は組織的な取り組みであると共に、看護師一人一人の看護行為が安全な医療に繋がっています。インシデントや有害事象の数を減らすことは勿論大事ですが、予防に成功した事例の中から改善策をみつけていくことも必要であると考えています。部署のスタッフと一緒にリスク感性の向上を目指していきたいと思っています。

草山　ひろみ（血液浄化センター）

血液浄化センターは体外循環を行っており、抜針事故が短時間で生命の危機へと繋がりかねません。患者さんの高齢化が進み認知症の患者さんも増えています。スタッフ全員で医療安全に関する感性が高まるよう取り組んでいきたいと思います。

坂田　慎一（総務課）

４月から大学の研究推進部から総務担当副部長、総務課長（兼）として氷見市民病院へ異動してきました。最近、年のせいか数ミリの段差にも転倒しそうになります。駐車場、玄関口の段差等にも注視しながら総務課スタッフ全員で患者さんの安全・安心を図っていきたいと思います。

医療安全ラウンドについて

安全への意識の向上と医療現場におけるリスクの抽出と改善を図るため、環境整備（5S）や、院内ルールの周知や実践状況の確認をすることで、安全に対する「感性」の感度を高めることを目的としています。平成 30 年度からラウンド部署より事前に自己評価表を提出してもらい、感染部門もラウンドに同行しています。ラウンドでの評価は部署にフィードバックを行い、各部署で改善を図っています。医療安全に対する意識の向上は、患者さんに安全で安心な医療を提供するために重要です。安心・安全な医療現場を皆さんの手で作っていきましょう。